

いかに人間と自然が一体化しているかということ象徴している。「自然」という言葉は明治頃に欧米文化が入ってきたことによって作られた単語だ。

原発や遺伝子組み換えのように、技術的には可能だがその影響が社会全体に及び、一度問題がおきると人間が管理できない領域には立ち入ってはいけない。またこれらの問題を科学者の良心だけにまかせるのではなく、科学技術倫理に基づき、社会全体で監視・管理できる仕組みを作り上げる必要がある。

エベレストはもともと海の底だった。それが今や8kmを越える山となり、頂上付近から太古の海に分布していたアンモナイトの化石が見つかる。地球ではそうした変化が起きてきた。人間の力はどうやっても自然には太刀打ちできない。そのことを改めて肝に銘じることが必要だ。どうすれば自然の猛威をかわしながら、その恵みを受け続けることができるのか、そこに知恵を絞らなければならない。大地は我らのものではなく、我らが大地のものなのだ。

## 行政

# 不眠不休の対応、震災の大きな爪痕。

大崎市

大場 宏昭 大崎市民生部環境保全課主査

取材日 2011.6.28

大崎市は広大で肥よくな大崎耕土を有する一大穀倉地帯で、世界の登録湿地の中で唯一水田を冠したラムサール条約湿地「蕪栗沼(かぶりぬま)・周辺水田」がある。地域の宝を次代につなぐため「マガンの里推進プロジェクト」や、地域の小中学生に環境教育を行う自然観察バス「マガン楽園号」を運行するなど、地域全体で環境活動に取り組む。

## 3月11日 14時46分

地震発生時は市役所にいた。携帯電話に緊急地震速報が入ったのですぐに席を立った。小学生の時に宮城県沖地震を経験しているので、どうしても地震は怖いという印象がある。宮城県沖地震は、近い将来かなり高い確率で発生すると言われていたので、大きく揺れた瞬間に「これは宮城県沖地震だ」と思った。立ちあがったとたんにもものすごい揺れとなったが、なんとか1階まで駆け降り外に出た。1978年の宮城県沖地震とは比較にならないほどの凄まじい揺れだった

市役所のすぐ近くには小学校があり、下校途中の子どもたちがあまりの揺れに道路にしゃがみこんでいた。すぐさま、コンクリート塀などの倒壊の危険に対する注意を呼びかけた。近くの古い蔵が音を立てて崩れた。市役所の建物自体はひびが入ったものの、幸い大きな被害はなかったが、市中心部へ目を向けると、建物被害が大きく、津波被害が甚大だった沿岸部だけでなく、内陸部の大崎市にも非常に大きな爪痕を残した。

直ちに災害対策本部が設置され、病院の入院患者の安否確認や、災害協定を結んでいる店舗等へおむつや毛布の調達に走ったが、店舗も非常に大きな被害を受けており、毛布が入手できず、停電で真っ暗闇のなか、日用品の調達がやっとなという状



態であった。直後は災害対策本部の仕事でしばらくの間帰宅するのは深夜に及んだ。その後、環境保全課で倒壊家屋等の震災廃棄物処分の業務を担当し、災害マニュアルに基づいてゴミの一時保管場所の確保や震災廃棄物搬入の受付業務を行った。4ヶ月経過した現在でも、震災に関わる業務がほとんどで、通常業務はまだできていないというのが現状である。

しばらくの間水道、電気が復旧しなかったこともあり、普段いかに便利な生活をしていたのかということを実感した。家族が全員無事だったということが救いだが、沿岸部の方々のことを考えると

本当に胸が締め付けられる思いである。南三陸町役場に勤務している知人が心配で、震災後1ヶ月程経過した頃に南三陸町へ訪れた。津波被害の大きさを目の当たりにして言葉を失ったが、知人と再会できた喜びに安堵し、家族も無事だったことを聞いて涙がこぼれた。津波で家や家族を失っても震災以来、不眠不休で震災対応の業務をしている職員の方々がいることを聞き、本当に頭が下がる思いであった。

## 震災を振り返って

ライフラインが寸断され、不便な生活だったことや、食糧やガソリンの調達が大変だったことなど、震災直後の生活を決して忘れてはいけないと思う。普段の便利な生活に慣れて忘れがちだった人への思いやりや家族とのコミュニケーションの必要性など、不便な生活をきっかけとしてさまざまなことを学んだような気がする。

## 環境活動に関して

環境保全課では、節電とCO<sub>2</sub>削減のために、市役所の敷地内にゴーヤを植えて緑のカーテンを育てたり、公共施設におけるエネルギー削減に向けた管理の徹底など細かな節電行動に取り組んでいる。緑のカーテンは今年で3年目を迎え、種まきや収穫には近くの園児達にも参加してもらっている。今年は震災の影響もあり、種から育てることができなかったが、震災を理由に取り組みをやめることはしたくなかったので、苗を購入して植え

ることにした。現在、元気にスクスク育っており、カーテンの出来栄えが楽しみなところである。昨年は希望する住民への苗の無料提供も行ってきたが、今年は前年度のように配布できず、住民から「今年はないの?」という声も聞こえてきた。夏に向けて緑のカーテンを育てると、涼しく・省エネになるという認識がしだいに市民の意識にも浸透しつつあると実感している。今回の震災は、日常の便利で快適な生活をもう一度見直すという点で非常に考えさせられた。市で開催する環境出前講座で地球温暖化をはじめとする環境問題をテーマにした講演でも熱心に聞いてくださる参加者が震災前と比べて増えたような気がする。復興にはまだまだ多くの時間を必要とするが、市民1人ひとりが身近なことから始める環境施策を考え、PRしていきたいと感じている。



撮影：2011.6.28 大崎市役所の緑のカーテン

## 企業

大崎市

# 酒屋が酒を造れなかった37日間。 心を込めた酒造りと環境保全型農業で恩返しを。

松本 善文 株式会社一ノ蔵 代表取締役社長

取材日 2011.6.28

環境に優しい企業を目指して、環境保全型農業に取り組み、酒米として環境保全米を、酒瓶にはリターナブル瓶を積極的に採用。社内で「社会貢献推進クラブ」を立ち上げ、全社員ができることからエコ活動に取り組む。震災後、被災した子どもたちのために「未来へつなぐバトン 醸造発酵で子どもたちを救おうプロジェクトF174」を立ち上げた。

## 3月11日 14時46分

東京新宿の高層ビルの42階で、全国から100歳元が集まる会議に出席していた。地震発生時は、ちょうど休憩時間で会社と携帯電話で話していたが、電話の向こう側から伝わってくる声で、尋常

ではない状況がわかった。ほどなく東京にも地震が到達し、高層ビルが折れるのではないかと思うくらい長く強い揺れが起きた。エレベーターが停止したので非常階段で地上へ降り、公共交通機関が使えなかったため、レンタカーを探したが貸してもらえず、巣鴨に嫁いでいた姉の車を借り、東